

研究成果の紹介

5 県北部での「ヒノヒカリ」栽培の可能性

ねらいと成果

近年の「おいしいお米」に対する消費者の指向により、県北部の水稻栽培面積の約9割に「コシヒカリ」が作付けされている。そのため、田植えや収穫作業が一時期に集中し、大規模農家の規模拡大やJAの施設稼働効率を阻害している。そこで、「コシヒカリ」との田植え・収穫時期等作業の競合が回避でき、さらに現行品種よりも市場評価が高い良食味品種への転換が要望されている。

本試験では、現在西日本で「コシヒカリ」について市場評価の高い中生種の「ヒノヒカリ」の県北部への導入について検討した。その結果、「コシヒカリ」田植え前の5月上旬に「ヒノヒカリ」を移植することにより、「コシヒカリ」を収穫して約10日後から「ヒノヒカリ」の収穫が開始でき、作業の分散が可能であることを明らかにした。

内容

「ヒノヒカリ」は中生に分類され、同じ5月12~13日移植で「コシヒカリ」と比較すると、出穂期が16日、成熟期が19日程度遅くなった(表1)。この場合の「ヒノヒカリ」の成熟期は9月29日であった。また、5月30日移植の「コシヒカリ」と5月1日移植の「ヒノヒカリ」を比較すると、成熟期の差は12日と短くなり、移植を「ヒノヒカリ」、「コシヒカリ」

表1 「ヒノヒカリ」と「コシヒカリ」の出穂、成熟期 (2003年~2004年平均)

品種名	移植日 月・日	出穂期 月・日	差 日	成熟期 月・日	差 日
ヒノヒカリ	5.01	8.16	- 2	9.29	0
ヒノヒカリ	5.13	8.18	-	9.29	-
コシヒカリ	5.12	8.02	- 16	9.10	- 19
コシヒカリ	5.30	8.12	- 6	9.17	- 12

注 差は5月13日移植の「ヒノヒカリ」を基準として比較

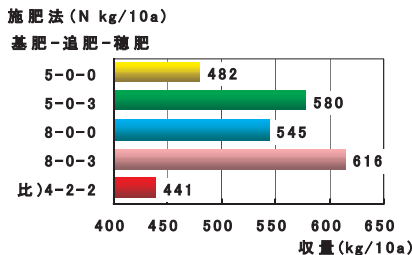


図 施肥法の違いによる「ヒノヒカリ」の収量

の順に行い、収穫を「コシヒカリ」、「ヒノヒカリ」の順に行う作付体系が可能と考えられた。

次に、速効性肥料の分施体系で「ヒノヒカリ」を県北部で5月上旬に移植すると、全般に生育量が少なく、また、登熟期に肥効が切れるため収量が低くなる傾向があった(図の4-2-2区)。そこで、140日タイプの緩効性肥料を用いた施肥法を検討した。その結果、基肥のみ窒素成分5 kg/10aでは「ヒノヒカリ」の生育量はやや不足気味であり、8 kg/10aに穂肥を施用すると玄米タンパク含有率が高くなり、食味の低下が懸念された。そこで、基肥を8 kg/10a程度とするか、基肥を5 kg/10aとして穂肥を施用することで、玄米タンパク質含有率は7%程度とやや高いものの、安定栽培が可能と考えられた。

以上のことから、県北部における「ヒノヒカリ」栽培ごよみの案を作成し(表2)、普及へ移した。

今後の方針

「ヒノヒカリ」の県北部導入については、獣害、カメムシの被害、9月以降の水管理が可能な地域に作付けが限られるなど、まだまだ解決しなければならない課題は多いが、「コシヒカリ」への品種集中を避ける一手法として、更に検討を進めていく。

岩井 正志(北部農技・農業部)

(問い合わせ先 電話: 079-674-1230)

表2 県北部「ヒノヒカリ」の栽培ごよみ(案)

月	作業内容	基幹防除	施肥体型
4	中 播種		
	下 乾もみ130g/箱		
5	上 移植	箱施用	基肥
	中 18.2株/m ² (30x18cm)	いもち病 ウンカ類	140日緩効性肥料 (窒素成分6-8kg/10a)
6	上	ニカメイチュウ	
	中 下	イネミズゾウムシ	
7	上		
	中 下	中干し(軽く)(葉いもちに注意)	(穂肥:通常不要)
8	上	いもち、紋枯病防除	(窒素成分2kg/10a)
	中 下	出穂 カメムシ類防除	
9	上		
	中 下	収穫直前まで走水	
10	上	収穫	